



トヨニシファームの小倉社長
(実証実験をする牛舎内で)

肉牛担保の融資普及へ、 生体管理データ収集

酪農・畜産向け I o T (モノのインターネット) を提供するファームノート (帯広市) や肉牛牧場運営のトヨニシファーム (帯広市) は、情報技術 (I T) を使って牛の日々の活動を管理するとともに、必要なデータを収集・蓄積して肉牛の資産価値を簡易に計りやすくし、畜産農家が銀行から融資を得られやすくするプロジェクトを始動した。

家畜の動産担保融資 (A B L) のモニタリング業務を受託する北海道酪農畜産協会 (札幌市) と肥育牛の経済・経営を研究する宮城大学、とかち財団の 5 者が企業連合 (コンソーシアム) を形成した。21年度末までに実証を終える。

実証では、牛に付けた首輪のセンサーから情報を集める「 F a r m n o t e C o l o r (ファームノート・カラー)」を活用、トヨニシファームの交雑牛、和牛の計500頭 (牛舎2棟) に装着して、活動、反すう、休憩の時間数などから健康状態を把握する。牛が長時間立ち上がれずに苦しんでいるのを検知する機能もあり、亡くなって資産が毀損 (きそん) するのを防げる。

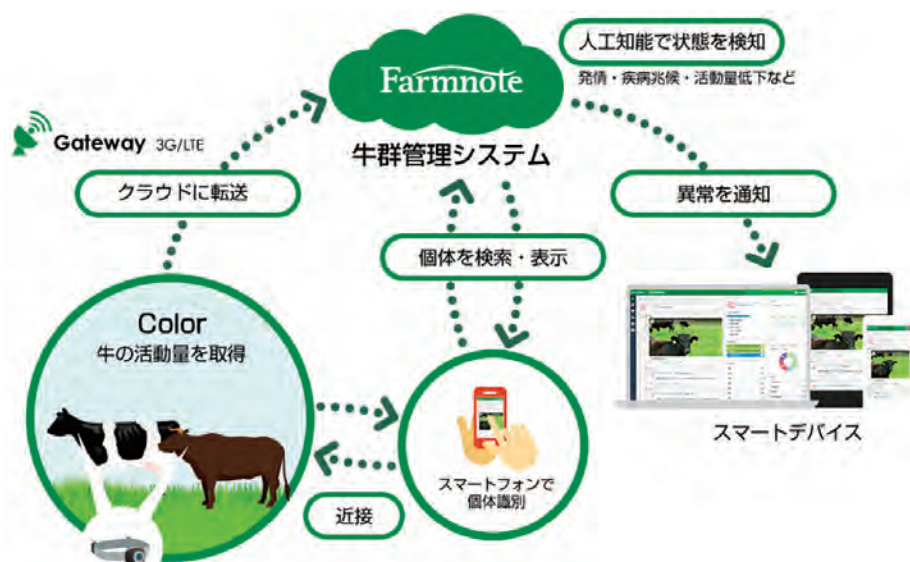
トヨニシファームの小倉修二社長は、「牛1頭の肥育にかかる経費は、10頭販売して得られる利益に相当する」と経営リスクになっている面を指摘、起立困難な牛がいないか夜や早朝に見回る労力も負担となっており、「どんなプラスの効果をもたらすか、技術は積極的に導入したい」と話す。

電波を用いて非接触でデータを読み書きできる R F I D タグを埋め込んだ耳標もつけて、牛が所定の牛舎に在籍しているかどうかや牛の導入、出荷の確認も効率化する。

銀行が畜産農家へ融資するのに、現在は土地や牛舎を担保に取ることが多い。動産担保融資では、銀行の担当者が牧場で牛舎内の牛群を目視で確認したり、牧場主からの資料を基に審査したりするのが一般的。手間と時間がかかり、この融資が広がりにくい要因になっている。

プロジェクトでは、肥育牛が成長して首輪がきつくなり、外して調整する手間を省くことも目指し、首輪の代わりに耳標を開発する。実証プロジェクトの代表、ファームノートはまずは試作した耳標のデータ読み取りの精度を確認しながら改良を重ね、22年初めまでに完成させる。

コンソーシアムは、データ収集と並行して、宮城大学、同協会の知見を通じ肥育牛を担保にした融資に必要な情報の項目を整理、 I T システムとして牧場が使いやすく、牛の管理に有益で、金融機関も動産担保融資を決めやすいものを構築することを目指す。



ファームノートの牛群管理クラウドシステムの概念図

十勝毎日新聞の
農業記事はこちらから

プラス
農  ビジネス北海道
AGRI + BUSINESS HOKKAIDO

